



カントウータ *Cantuta*

No. 54



ティワナク遺跡太陽の門 写真提供：株式会社ラティーノ 代表取締役 田中純一氏

1.

ボリビアと日本を繋ぐ企業・団体情報

 :
- 中南米専門旅行会社 ラティーノ 田中 純一
2. ボリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ
- 疾病・災害・差別を生き抜いた人々— その4 渡邊 英樹
3. 110年前の外交関係樹立 大島 正裕
4. 堀内伝重の終焉の地を訪ねて（前半） 佐藤 信壽

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

ボリビアと日本をつなぐ企業・団体情報

**1. 中南米専門旅行会社：
株式会社ラティーノ**

株式会社ラティーノ 代表取締役
一般社団法人日本ボリビア協会 理事
田中 純一

1. 設立の経緯

弊社は今年で創業31年を迎える中南米専門の旅行会社ですが、設立に関しては私の中南米との関わりからお話する事になります。

今から40年前の1983年に私は新卒としてペルーに本社を置く日系の旅行会社である株式会社金城旅行社の日本支社に入社致しました。それ以前は南米とは何の関りも思い入れもなく単に旅行会社志望であった私は当時右肩上がりであった海外旅行を取り扱う旅行会社に多く見られた〇〇ツアーやら、トラベル〇〇などのカタカナ社名が溢れて来た時代に「金城旅行社」というどうにも時代に乗り遅れている感のする社名に何故か興味を持ち入社致しました。

そこで初めて「金城」はキンジョウと読み沖縄から移民した伝説的創業者である故金城新哲社長の名前からとったものである事そして日本から南米への移民の歴史などを学んでいきました。

今でも忘れられない場面があります。入社1年後初めて南米ペルーを訪問した時の事です。リマのセントロと呼ばれる旧市街の広場で、日本の駅弁売りのようなスタイルで木箱にたばこを一杯に詰め

その1本売りをしていた少年を目撃しました。タバコの1本売りにも驚きましたが平日にも関わらず、昼間に働いている少年、また別の場面では車の行きかう道路で信号待ちの車に両手いっぱいのお菓子をもち少し薄汚れた民族衣装を来た物売りの少女や車の窓拭きをさせてくれとせがむ少年など、いずれも小学生位の姿に今のようなインターネットもなく外国の実情も良くわからず、平和ボケして育ってきた私には少なからずショッキングな場面でした。

その頃から中南米への様々な思いが絡み合い今の仕事に続いているのだと思います。そこで9年程働いた頃、ペルーではテロ組織センドロ・ルミノソによる日本人専門家殺害という不幸な事件の影響を受け日本からの観光客は皆無という状態が続いており、我々の仕事も開店休業状態でした。この時志を同じくした二名と一念発起して自らの会社ラティーノを立ち上げました。1992年私が29歳の時でした。



写真1-1 金城旅行社勤務の頃

そのような経緯であったため当初より業務は自分達のやってきた得意とするべ

ルー、ボリビアを中心とした南米地域専門として営業を開始しましたが、新しく立ち上げた会社においては、現地とのしがらみが少ない分、特定の国だけに依存する事なく、広くメキシコ以南の中南米をくまなく網羅する旅行会社になりたいと思い、一か国ずつ現地の旅行会社との提携を進めていき、現在のようなメキシコ以南、中米、カリブ海諸国を含めた南米から南極までを総合的に手配できる体制を整えていきました。



写真1-2 マチュピチュ遺跡

2. 現在の業務内容

弊社の業務内容としては、現在大きく3つに大別されます。

① ツアーオペレーター業務

日本の旅行会社とりわけ海外旅行を取り扱っている旅行会社は、実は自社で海外のホテルや車両、ガイドを手配している会社は殆どなく、有名な大手旅行会社といえども自社で手配しているのは海外支店のあるハワイやアメリカのロサンゼルスやニューヨーク、あるいはヨーロッパでもロンドンやパリなどのごく限られ

た地域限定でありそれ以外の地域に関しては弊社の様な地域に特化した専門旅行会社に委託しているケースがほとんどです。

こうした他旅行会社から委託を受け、その国のホテル、車両、ガイド、レストランに至るまでの現地手配一切を行う業務をツアーオペレーター業と言い、弊社は中南米地域のツアーオペレーターとして北海道から沖縄までの日本全国の旅行会社から委託され、地上手配業務を行っております。

依頼元は、JTB、近畿日本ツーリスト、日本旅行、HISなどの大手旅行会社から、その地域毎の地場の旅行会社から中小の旅行会社に至るまで多岐に渡ります。具体的な内容も単純な観光ツアーだけでなく、例えば企業の業務視察、各都道府県単位の現地県人会式典参加等の行政関連の現地訪問団手配、各種国際会議出席の為の各手配や、最近多く見受けられるのは各スポーツ団体の世界大会参加に付随する手配などありとあらゆる業態のものになります。



写真1-3 業界向けキューバセミナー

② 直接のお客様手配

二番目は弊社のような零細企業でも信用して頂き、直接ご依頼頂く個人、企業の方々の業務です。この場合はもちろんご依頼頂ければ、日本発着の国際線の航空券の手配から弊社にて行います。この場合も、あえて大手旅行会社ではなく弊社のような専門店にご依頼頂くお客様達ですので、非常に強い思い入れや一般的ではない地域への訪問依頼などまさしく唯一無二のご旅行のご依頼となる場合が多いので、こちら身引き締まる思いでご手配させて頂いております。



写真1-4 ポトシの街と人

例えばこのような事例がありました。その方はご結婚記念のハネムーンでのご依頼だったのですが、ご主人が相当の列車？地下鉄マニアの方でいらっしゃり、都内を走っていた丸の内線（ご存じの方も多いと思いますが、赤に銀の模様が入った長く親しまれてきた車両です。）に子供の頃、何かの記念乗車をされその車両が引退後アルゼンチンのブエノス・アイレスで現役として走っているという情報を掴み、なんとかその車両に乗りたいというご希望でした。ただし現役と言っ

ても、やはり年式が古いためブエノス・アイレスでも運行はごく限られた範囲でのものであったようで、現地代理店を通じてその車両の運行スケジュール（区間や日時）を調べ、お客様訪問時に乗車できるように手配させて頂きました。帰国後大感激されたお客様が撮った300枚は優に超える旧丸の内線の画像を拝見いたしました。（苦笑）



写真1-5 旧丸の内線車両

また、ある時は南米への長期単独ご旅行中に不幸にして現地でお亡くなりになられてしまったご子息の足跡をご家族で訪ねるご旅行や、お父様の仕事の関係で子供の頃に数年過ごした街の思い出を頼りに、ご自身が定年後再訪する旅など皆さまそれぞれご旅行一つ一つに旅の物語があり、そのお手伝いをさせて頂ける喜びを感じています。

③ インバウンド業務

これが一番最近始めた業務ですが2014年のブラジル・ワールドカップ、2016年のリオデジャネイロ・オリンピックを通じ、多少会社には余裕が出来た事によりこのタイミングで新規事業を、と思い、当時国

ぐるみで取り組みを始めていたインバウンドに弊社もあやかろうとの下心？から始めた業務です。

この時も一般的には中国を筆頭としたアジアからの訪日客が連日取沙汰されておりましたが、弊社では自分達の得意地域である中南米からの訪日客のみをターゲットとしたインバウンド業務に特化して業務を開始致しました。実はこの時始めたインバウンド業務がその後に来る大災害を切り抜けて生き残る一番のポイントになるとはこの時は思いもよりませんでした。



写真1-6 ワールドカップ手配時



写真1-7 コロナ前の旅行博出展時

3. 存続の危機となったコロナ禍

会社創業時は、①のツアーオペレーター業務が会社の約8割を占め、次に②の

直接のお客様の比率を高めていき、最後に、③のインバウンド業務開始と順次業務を追加してきました。日本から中南米へ、そして中南米から日本へという双方向の旅行を取り扱う事により、過去に経験してきた、一か国単位での政情不安や治安悪化などからの損害を被るリスクをヘッジすることができました。

単一地域、単一業務に頼らない体制を作る事で、小さいながらもどうにか業界内でも徹底した専門性が評価され、東京と大阪に事務所を置き、スタッフも少しずつ増え、最大18名までに業態が拡大した会社でしたが、2020年発生の新型コロナにより全てが一変してしまいました。

人の移動そのものが制限されるという考えもしなかった事態となり、観光・業務を問わず、人の移動そのものを生業としてきた我々旅行業界、とりわけ海外旅行をメインとしてきた会社にとっては正に青天の霹靂といった出来事でありました。

この時先の見通せない不安と圧倒的な絶望感にさいなまれながら、今何をなすべきかを必死に考え、まず私自身が冷静になり、事態を把握する事、そして危機管理の原則ともいえる「最悪を想定して最善を尽くす」と自分に言い聞かせました。

日々感染状況悪化の報に触れながらも今後の事態の推移を自分なりに考え出した結論は「それでも人は旅をする。」という事と、それまで何としてもこの状況をサバイブするという決意でした。ただ

し、同時にそれには相応の時間を要するという事も理解し、その期間を短くとも最低2年間はこの状況が続くと腹を括りました。

取り急ぎ無用となってしまった大阪、東京の事務所は解約し、完全なテレワーク体制となり、社員には1年間は雇用を継続する旨、ただ事態が好転しなければ1年後には会社縮小も想定するので、それまでの1年間で自身の身の振り方を考える時間としてほしいと伝えました。

同時にこの時期仕事も全くない状況でどうやって社員の気持ちを繋ぎとめていくかを考え何かしら取り組めるものとして一気に広まったZOOM等を利用したオンラインでのスペイン語・ポルトガル語教室、オンラインでの南米料理教室、そしていわゆるオンライン・ツアーを弊社でも手掛け、皆で手分けして休業している期間に行ってきました。



写真1-8 旧事務所最後の日



写真1-9 ラテン料理教室のチラシ



写真1-10 オンライン・ツアー

しかし、やはり当初予想していたように、1年程度では事態は好転せず、2021年の春には苦渋の決断で組織を縮小せざるを得ず、社員の数も1/3となり、また1992年の創業以来苦楽を共にしてきた共同経営者も去る事となってしまいました。

4. 「それでも人は旅をする」

昨年2022年の春以降ようやく国境再開の動きが現実的となり、それに伴い業務も少しずつですが問い合わせも増えてきました。

そして昨年10月の国境再開以降は日本人の海外渡航よりも、海外からの訪日が一気に回復基調に戻り、弊社でもインバウンド業務が急回復となってきました。一応この流れもある程度予想していたので社員も少なくなりながらインバウンド業務を担当する社員だけは全スタッフ残るよう説得しておりましたので昨年10月以降は、それまでの月数日出社の休業体制から100%出社体制に切り替え、なんとか危機を脱したという所まで来たと思っています。

今年2023年に入ってから折からのエネルギー危機や円安により、日本からの海

外旅行はまだ4割程度の回復ですが、代わりにインバウンドは好調でこの業務は既に2019年を超える状況となっています。当初はインバウンドと言っても中南米からなんて本当に訪日するのだろうか？と自分達自身でも懐疑的だった部分でしたが、今やメキシコ、アルゼンチン、ペルー、ブラジル、チリなどを中心としてカリブのプエルトリコや米国のスペイン語系の人々が多く住むロサンゼルスやマイアミなどからも弊社の扱うスペイン語、ポルトガル語のお客様が途切れる事なく来日されております。

一時期6名にまで減少したスタッフでしたがその後の回復途中から採用を再開し5名程新たに加わり現状11名となり今後もう少し増やしていく予定です。

そして今年10月には3年半ぶりとなる新事務所を東新宿に構え、心機一転営業しております。

来年には日本人の海外渡航も、もう少し回復が進むと思われますので、ここまで来てようやく大きな、大きなコロナ禍という山を一山超えたかな？とまだまだ油断は出来ませんが、一息ついている次第です。

これもひとえにコロナ禍の厳しい状況の時にもお声かけ頂き、応援して頂いた日本ボリビア協会をはじめとした皆様のご厚意の賜物です。この場を借りてあらためて心より御礼申し上げます。

今後は従来にもまして自社の専門性を高め、このコロナ禍で旅行業界からの大量の人材流出も叫ばれている中、日本の

皆さまが安心して中南米をご旅行する際の案内役となれるよう、また中南米からの訪日のお客様にとっては我々の住むこの美しい日本を快適にご旅行頂けるようスタッフ一同精進してまいる所存です。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

(終わり)



写真1-11 新事務所にて集合写真



写真1-12 オルロのカーニバル、ディアブラーダ

~~~~~

当社のホームページは以下の通りです。

日本人向け <https://www.t-latino.com>

訪日用 <https://www.turismojapon.jp>

## 2. ボリビア開拓記外伝 —コロニアオキナワ 疫病・災害・ 差別を生き抜いた人々— (6)

日本ボリビア協会相談役

渡邊 英樹

クーデターに明け暮れる国

着任して、半月もしないうちにクーデターがあった。笑い話的であるが「革命を観たければ、3カ月間ボリビアに滞在すれば良い」とアメリカの旅行ガイドブックに書かれていたという時代であったが、まさか、いきなりそれを経験するとはい思ひもよらなかった。それにしても、すさまじい年であった。着任した1969年は3回も大統領が替わった。

これは、ボリビアだけの問題ではなかった。東西冷戦の陰が世界中を覆っていたからだ。南米大陸の「植民地的支配からの脱却と民主化」という大きな潮流に沿いつつも、なんとか共産主義化を食い止めようとしたケネディ米国大統領の下で進められた「進歩のための同盟」構想は、米国の多額の経済援助にもかかわらず思うような成果を上げられず修正を迫られていた。経済援助資金の利権を狙っての政争が激化さえした。

キューバ革命の成功、ベトナム戦争で有利な展開に力を得た共産主義陣営の攻勢は勢いを増して、それは1966年11月にチェ・ゲバラが、ウルグアイ

のビジネスマンに扮装してボリビアに入国してジャングルに潜伏したことで頂点に達した。ゲバラが築いたアルゼンチン、パラグアイ、ブラジル、ペルー、チリの連絡網によって南米大陸に共産主義革命の火がつくのを阻止するため、それまで「政権交代には不介入」としてきた米国は文民であろうと軍人であろうと反共産主義者であれば支持する方向へと政策転換を図らざるを得なくなった。その結果、この時期の南米大陸は米ソ冷戦の代理戦争的な紛争が、至るところで起きていた。その中でもボリビアは特別に政変の頻度が多かった。

ベトナム戦争が、資本主義陣営と社会主義陣営の対立のマグマが噴出する大噴火口とすれば、ボリビアは常に、小爆発を繰り返す小火口と言えた。



写真2-1 海外移住事業団事務所近くから大聖堂を望む  
(1970年筆者撮影)

ソ連の後ろ盾で左翼政権が樹立されると共産党の工作員（オルグ）四、五百人がソ連大使館に入った、とラパス市の日本



人から情報が入った。その状況を米国と気脈を通じた軍人がクーデターによって右翼政権を樹立してひっくり返すというせめぎ合いが繰り返された。しかし1969年8月のオバンド將軍のクーデターで事態は一変した。オバンド大統領は米国のガルフオイルを国有化して極端な反米、極左翼の政策を推進した。CIAやグリーンベレー（ベトナム戦争を戦ったアメリカ陸軍特殊部隊）の姿はもちろんのこと、一般のアメリカ人でさえも家具や車を投げ売りして我先にと本国へ逃れて、サンタクルスの街の中でアメリカ人の姿がまったく見られなくなった。



写真2-2 シーレス大統領が列席しての独立記念日のパレード。星条旗にドクロのマークを付けて反米感情を煽っていた。この数日後にオバンド將軍のクーデターがあった。手前背広姿は武田健司日本人移住100周年祭典委員長（1969年8月）

この革命は、世界的英雄となっていたチェ・ゲバラが1年半前にここボリビアで殺されたことに対する共産主義陣営の総力を挙げた弔合戦と映じた。余談になるが、ゲバラ兵士の中に、フレディ

前村という日系人の兵士がいたことは、当初はまったく知られていなかった。三好徹氏が『チェ・ゲバラ伝』（文藝春秋社）の初版を出版される前に現地取材にやって来られて、我々職員がアテンドしたが、会食等の時間の時もフレディ前村の話題は一切なかった。サンタクルスから北へ50キロ、コロンニアオキナワとコロンニアサンフアンのにほんじんいじゅうちむぶんきてん（日本人移住地）に向かうのに分岐点となっている町モンテローがある。ここに、チェ・ゲバラを逮捕したレンジャー部隊があった。

米国は、グリーンベレーを軍事顧問団として派遣してゲリラ戦士の掃討作戦を展開していた。もし、ゲリラ兵士の中に日系人がいると知られていたら、サンフアンとオキナワの両移住地ともレンジャー部隊の監視下におかれ、日本人移住者の往来は、厳重な検問を受けたのではなかったかとゾッとしたものである。

フレディのお姉さんの出版本（『革命の侍——チェ・ゲバラの下で戦った日系2世フレディ前村の生涯』マリー・前村・ウルタード著・伊高浩昭監修・松枝愛訳2009年8月）によると、フレディ前村は鹿児島県出身の戦前移住者を父に持ち、医学奨学生としてキューバに留学中にチェ・ゲバラに共鳴

して、ボリビアにいる家族にも秘して、  
ゲバラの部隊に合流している。幸いに  
「エル・メディコ（医者）」等の愛称で  
呼ばれていたため日系人と知られなかつ  
たと思われる。ゲリラ兵士のほとんどが  
レンジャー部隊に捕らえられ、拷問を受  
けて、白状していく中で、彼は何も喋  
らず処刑されたといわれている。

### 政情不安が日本人の土地を脅かす

これらの政変は、一見、日本人には、  
関わりのないように見えるが、実は、  
移住地も我々も無縁ではいらなかった  
のである。「外国に住む難しさ」が、こ  
こにある。それは、左翼政権になると決  
まって打ち出される政策が「農地改革」  
であったからだ。ボリビアの農地改革法  
は、戦後のGHQ主導の小作農の廃止、  
自作農創設を目指した日本の農地改革法  
を手本としたといわれている。

(注釈：原本では[小作農創設]となっているが自作農創  
設に訂正する)

日本の場合は、現在は、細分化された  
農地の有効利用が進まず農業改革のネッ  
クになっているが、当時は、自作農とし  
て土地を取得した人たちの勤勉さによっ  
て反当たりの収穫量の増加もあり、  
一定の成果を上げた。

しかし、ボリビアでは「耕作されてい

ない土地を耕した者に所有権を与える」  
という条文が拡大解釈されて、耕作を  
休ませている土地などにも勝手に侵入し  
てきた。そして、土地を取得した者の  
生産性が上がらないから、左翼政権にな  
ると、決まって穀物不足になった。その  
対策のために緊急輸入した小麦を、外国  
に転売して販売代金を懐にいられた役人  
と軍人がいるなどというニュースも報じ  
られた。

「ラティフンディオ（大土地所有）  
反対」を掲げた集団が、日本人移住地に  
も不法侵入してきた。コロンビアオキナワ  
でも、数軒の農家がその被害にあってい  
る。サンフアン移住地の農業試験場の  
奥にある将来の飛行場予定地としてい  
た土地に侵入した事件の現地裁判では、  
サンフアンの自治体の代表や事業団  
職員が、100人以上の侵入者に取り  
囲まれた。侵入者は「ここは我々の土地  
だ」「日本人は出て行け」と叫び、マチ  
エテ（小枝払い等の農作業で使う幅広の  
山刀）を空に向かって突き上げた。

裁判には勝ったものの判決どおりに  
執行をしてくれないから何の解決にもな  
らない。日本からは「裁判に勝ったのに  
どうしたのか」と言ってくる。東京本部  
との温度差に悩まされることになる。  
不法侵入者に金を払って出て行ってもら

うのか。その金を誰が出すのか。残るのは、自ら武装して追い払う以外に解決策はない。

しかし、それをやったら国際問題になる。そんなジレンマの連続であった。サンタクルス市近郊で蔬菜栽培を営んでいた沖縄県出身者の土地にも不法侵入して来た。おそらく、番犬が吠えたのであろう。これに学生運動が絡んで「日本人が、我々を犬で追い払った」とラジオで反日感情を煽る放送をしきりに流す。さらに「日本人移住地の病院は我々を見殺しにする」などと喧伝し始める。腹に据えかねてレネモレーノ大学の学生運動のアジトに乗り込む決心をした。

この時だけは、いつも私に喜んでも同伴してくれるボリビア人のオスナ職員も、恐れをなしてついてきてくれない。顧問料を払っていても、ほとんど仕事のなかったエミリオ・ウルタード弁護士に同伴を頼んだ。さすが弁護士、承諾してくれた。

大きな教室が身動きできないほどの学生で埋め尽くされた。その殺気だった熱気の中でウルタード弁護士が、日本とボリビアとの移住協定によって、日本人医師がボリビア人を診療できないと定められていることを話した。代わって私が毒蛇にかまれたとか、交通事故にあった

とか、人命に関わる場合は、ちゃんと対応していることを説明し、さらに、15人の犠牲者を出したうるま病にもふれて日本人は、最初からインフラ整備が整った土地に入植したのではなく、あらゆる困難を乗り越えて現在の状態にたどり着いたことを強調した。また、日本人が開発したコロニアの利便性と日本人から学んだ農業によって、その周辺地域で多くのボリビア人が生計を立てられるようになったことを付け加えた。その結果、幸いにして翌日から煽動的な放送はピタリと止まった。



写真2-3 日本人会合同での独立記念日の行進。前列左から2人目が筆者、右から3人目が伊集朝規初代琉球政府ボリビア事務所長

しかし、不安定な政治情勢は、コロニアの将来を暗いものにしていった。それがコロニアを離れる人々を増加させる要因にもなった。サンタクルス市日本人会も各移住地と合同で独立記念日には「日本人移住者はサンタクルスの市民と共に」



おうだんまく かか こうしん ゆうこう そくしん  
の横断幕を掲げ行進し、友好の促進に  
けんめい つと  
懸命に努めなければならなかった。

## クーデターを起こした大佐への送金

そんな中で、日本人のボリビア社会へ  
こうけん いちばんりかい  
の貢献を一番理解してくれていたのが、  
とうぶちく かいはつ めざ ないこく  
ボリビア東部地区の開発を目指して内国  
しょくみんせいさく お すす せいふ  
植民政策を推し進めていたボリビア政府  
しょくみんいんそうさい たいさ  
の植民院総裁レメイトレ大佐であった。  
じしん せいさく すす うえ  
自身が政策を進めていく上で、どれだけ  
せいび  
のインフラ整備をしなければいけないか  
りかい  
を理解されており、それが、ほとんどな  
じょうたい みかい ち  
されていない状態で、未開の地に入り、  
かいたく  
開拓してきたサンフアンとオキナワのコ  
たか ひょうか  
ロニアを高く評価していた。

ボリビア政府が、財政難から外国人  
とうろうこう あらた とうろう こうしん ひとり あ  
登録法を改めて、登録の更新に、1人当  
とうろうぜい か  
たり20ドルの登録税を課したことがあつ  
た。その時、彼は、日本人が、どれだけ  
しゃかい こうけん げんぎゆう  
ボリビア社会に貢献したかに言及してく  
とうろうぜい はんたい ろんぶん  
れて登録税に反対する論文をコチャバン  
し しんぶん とうこう しんぶん わたし  
バ市の新聞に投稿して、その新聞を私に  
おく  
送ってくれた。

たいさ けい ぐんじん  
レメイトレ大佐はドイツ系の軍人であ  
わたし ふにん とぎ  
った。私が赴任した時のサンタクルス  
し ぶちょう さわじたかはる もとりくぐんちゆうい  
支部長の澤地隆治さんも元陸軍中尉であ  
ふたり たが ころろ ゆる あ  
ったから、2人はお互いに心を許し合う  
よ かんけい  
良い関係にあった。ボリビアからパラグ  
し ぶちょう てんきん さわち  
アイの支部長に転勤する澤地さんから、

わたし か たいさ りょうこう かんけい  
私が代わって、大佐との良好な関係を  
い じ めいれい にほんじんいじゅうち  
維持せよと命令された。日本人移住地へ  
ふほうしんにゆう かくだい  
の不法侵入が拡大しないようにするため  
たいさ きょうりよく ひつよう  
には大佐の協力がぜひ必要であったか  
らだ。



写真2-4 コロニアサンファンを訪れた帽子姿のレメイトレ植民院総裁夫妻（1970年 筆者撮影）

ところが、事態は思いもよらない方向  
てんかい たいさ  
に展開した。そのレメイトレ大佐が19  
ねん ほか ふたり ぐんじん とも さよくせいけん  
70年に他の2人の軍人と共に左翼政権  
だとう お  
打倒のクーデターを起こし、いったんは  
だいとうりょう ふ はい にん ごうぎせいせいけん  
大統領府に入り、3人による合議制政権  
ほつそく むね せんげん  
を発足させる旨の宣言をしたのである。

しかし、ソ連政府の後ろ盾を得た空軍  
れんせいふ うし だて え くらぐん  
のファン・ホセ・トーレス将軍が、左翼  
せいけん けいぞく かか だいとうりょう ふ くらばく  
政権の継続を掲げて、大統領府を空爆  
とき にほんじんかいかん  
した。この時、ラパスの日本人会館も  
せんとうき きじゅうそうしゃ なが だま まど  
戦闘機からの機銃掃射の流れ弾で、窓ガ  
わ  
ラスを割られている。やむなくレメイト  
たいさ だいとうりょう ふ はい すうじつご  
レ大佐は、大統領府に入ってから数日後に、  
りんごく だいとうりょう  
隣国パラグアイのストロエスネル大統領

を頼って亡命した。

そして、亡命先に生活費を届けに行つた大佐の長男が尾行されて、パラグアイの首都アスンシオンで銃撃され、負傷してしまう事件が起きた。おそらく、パラグアイにいる澤地さんとレメイトレ大佐の相談の結果であろうが、澤地さんから連絡が来て、私がレメイトレ大佐の親族から極秘に生活費を受け取ることになった。親族の女性から受け取った現金と同価値のドル小切手をパラグアイの澤地さんの部下に送ることにした。さらに安全を期すため、私の送った小切手を直接渡さないでパラグアイ通貨に現金化してから大佐に渡すという段取りにした。

その後、1971年にウーゴ・バンセル・スアレス大佐が武装蜂起し、トーレス政権を倒して右翼政権を樹立した。この革命の戦闘は激しくサンタクルスでも、あまりの銃声の激しさに我々も事務所の床にガバッと伏せたこともあった。決着がつくまでに数日を要したので末永支部長と西野オキナワ事業所長はもし、バンセル大佐の革命が失敗に終わった時には、私の身に危険が及ぶ恐れもあるとして、私をブラジルに逃す算段をしてくれていた。

革命成功の直後に、レメイトレ大佐はパラグアイからサンタクルスに戻って私

を訪ねてくれた。新聞で報じられていた「パラグアイからバンセル軍に自動小銃100丁が提供された」という件については、大佐が関わっていたか否かは聞きそびれてしまった。そして、大佐は日本人移住地の中に、ご自分の「終の住処」を設けたいと希望されたので、私も協力するつもりでいたが、残念なことにコチャバンバ市内の交通事故で亡くなってしまわれた。偶然であったのか、あるいは何らかの意図が働いた事故なのかは、不明であった。(つづく)



写真2-5 最初に住んだオルロ通りの家。電柱の奥が入口、左側にガレージとパティオがあり、裏庭にはマンゴーの巨木があった。(1969年筆者撮影)



写真2-6 田河水泡先生から託された「のらくろ」の原画をオキナワ中央病院へ寄贈(1969年)

ちゅうき しゃしん ず  
注記：これまでの写真および図は「コロニアオキナ  
にゅうしよく しゅうねんきねんし いんよう  
ワ 入 植 50 周 年 記念誌」から引用。  
ほんしょ せい ひと よ  
※本書は、日系2世の人たちが読みやすいように  
ぜんかんじ  
全漢字ルビをふっています。



琉球新報社のご厚意で転  
載させていただきます。  
ご関心を持たれた方は下  
記琉球新報社URLをご覧  
ください。

<https://store.yukyushimpo.jp>

## ★スペイン語版が発刊されました☆

本誌で、すべての漢字にルビをふった『ボリ  
ビア開拓記外伝』（琉球新報社 1900 円+税）の  
小分けの連載をしておりますが、そのスペイ  
ン語訳本『BOLIVIA REGISTRO DE UNA  
HISTORIA PARALELA』が、明石書店(2500  
円+税)より出版されました。

本誌の日本語文とスペイン語訳本を対比すれ  
ば、日本語やスペイン語を学んでいる人々の  
双方にとって、対訳のツールとして有用です。



訳者の大城ロクサーナさんと筆者

## 3. 110年前の外交関係樹立 立教大学 ラテンアメリカ研究所研究員 大島正裕

### 1. 日本とボリビアの国交樹立110周年

来年2024年は、日本とボリビアの外交関  
係が樹立されてから110周年である。2014  
年には両国間の記念行事等もあり、私も  
主催者側としてこのイベントに関わる栄  
誉を得た。

110年前の1914年、日本は、大正時代の  
真っ只中。日露戦争を終え、第一次世界  
大戦前の日本はまさに東洋の先進国とし  
て国力の伸長期だった。対して、ボリビ  
アは1899年の連邦革命を経て、錫鉱山を  
支配する寡頭支配体制と結びついたラパス  
を本拠地とする自由党が政権の座にあっ  
た。政治家にはならなかったが、錫鉱山  
主として世界の富豪ランキングに名を連  
ねたシモン・パティーニョをはじめ、ア  
ラマヨ及びホッホチルドが錫財閥を形成  
し、1913年には、錫は、ボリビアの輸出全  
体の70%を占めるようになっていた。

このような時代に両国は通商条約を締  
結し、外交関係を樹立したわけである。

今年（2023年）は、日本がペルーと外交  
関係を樹立してから150周年で、これが近  
代の日本とラテンアメリカの関係の開始  
である。因みにペルーとの関係は、有名  
なマリア・ルス号事件を発端にし、これ  
を契機として日本とペルーの間で1873年日  
秘修好通商航海条約が締結された。それ  
から6年後、このペルーを巻き込んで、ボ  
リビアはチリと太平洋戦争（Guerra del Pac  
ífico）を戦ったが、その相手国であるチリ



は、1897年に日本と外交関係を樹立した。ボリビアとの外交関係樹立が遅れたのは両国で重要なテーマがなかったことにあるのだろう。

## 2. 初代駐日ボリビア公使ビクトル・ムニョス・レジェス (Victor Muñoz Reyes) の活動

両国で外交関係が樹立されてから、ボリビアは、1918年には同条約に基づいて、初代駐日ボリビア特命全権公使を派遣した。1960年代から70年代にかけて活躍したフアン・シレス・ゲバラは、雑誌『コラスヨ (Kollasuyo)』に1970年「アジアにおける初の外交使節団」というボリビア外務省の記録に基づいて執筆した論文を寄稿した。外交関係樹立後にボリビアの外交団が日本でどのような活動を行ったのかというのは、ほとんど知られていない事実であり、その中には極めて貴重な活動も垣間見えるので、主にシレス・ゲバラの論に沿って、初代駐日ボリビア公使となったビクトル・ムニョス・レジェス (Victor Muñoz Reyes (1879–1937年) の日本での活動を見てみよう。

ところで、1914年までに、ボリビアは順調に大国との外交関係を樹立してきた。1879年にはフランス、1897年に英国、1880年に米国、1910年にはドイツ、1911年にはイタリア、1913年にはオーストリア・ハンガリー帝国と外交関係を築き、その後、日本とは1914年の外交関係樹立に到った。このあたりについて、2014年に両国の国交樹立100周年を記念して製作された『ボリ

ビアから日本へ』という分厚い冊子においては、自由党のイスマエル・モンテス (Ismael Montes) 大統領が日本に着目していたと述べている。

外交関係樹立から4年後、ボリビア外務大臣リカルド・ムヒア (Ricardo Mujía) は初代公使としてムニョス・レジェスを任命し、日本に派遣することになった。ムニョス・レジェスは、日本が急激に台頭し、世界の重要なアクターになりつつある日本の諸制度や軍隊をよく研究するように訓令を受けたようである。ムニョス・レジェスは、国際法を学び、外務省ではアルゼンチンやチリとの国境問題関連の任務にあたってきた人物であった。

他方、当時のボリビアにとって重要な外交的課題は、隣国チリとの領土問題であった。太平洋戦争で敗北を喫したボリビアは、1904年の講和条約で太平洋岸の領土をチリに譲渡せざるをえなかったが、当時ボリビアの政権を担っていた自由党は、そもそも結党に際して、チリとの交戦継続を主張した勢力でもあるので、チリを仮想敵国として、その動向に気を配っていたようである。外相のムヒアによると、この頃、チリは日本から大量の武器や弾薬を購入し、チリの下士官が日本軍の組織や軍事産業についても研究したらしかった。このように地球の裏側を舞台にチリとボリビア間で争いが継続していたという事実は非常に興味深い。

1920年7月まで日本に滞在したムニョス・レジェスの活動について、シレス・ゲバラは4つの点に分けて記載している。ま

ずは、日本との関係強化である。

### 3. 日本との関係強化

1918年5月20日に東京へ着任したビクトル・ムニョス・レジェスは、書記官のホルヘ・バルデス（Jorge Valdés）、公館付武官のファウスト・ゴンサレス少佐（Fausto González）を随伴し、6月13日、大正天皇に対して信任状を捧呈した。ムニョス・レジェスは、プレスにむかって「（私の外交活動の目的は）日本とボリビアの関係の緊密化、特に日本との貿易関係の強化であり、日本人移民の奨励である」と述べている。ここでムニョス・レジェスの念頭にリベラルタ等北部地域への日本人移住者のことが思い浮かんだかは定かではない。

ムニョス・レジェスは隈重信等の要人とも接触して、日本との関係を強化していった。さらに、バルデスやゴンサレスは当時日の出の勢いだった日本軍の基礎情報も収集していた。なかでもゴンサレスは武官らしく、モーゼル銃のスペア部品や弾丸を日本に発注することを検討したり、1919年4月から9月の半年間、日本陸軍の砲兵隊に入隊したりして文字通り日本陸軍を内側から知ろうとした。このように東洋の新興国の軍事的成長の秘密を必死につかみ取ろうとする姿勢は大変興味深い。

二点目は、アジアにおける領事館の管轄問題である。当時、アジアの数少ないボリビア領事館は、ロンドンのボリビア公使の管轄下にあったが、これをムニョ

ス・レジェスは東京から管轄するようにし、アジアの領事業務の拠点を日本に置いた。日本国内の商業上、領事業務上で重要な都市である横浜、大阪及び神戸にも領事館を設置し、（1919年6月に横浜領事になっていた）Fioravanti Chimenzを東京領事、Katsutaroを大阪領事、Ino Inabataを神戸領事とした（各人の正式な名前については別資料にあたって確認できなかったため、後日改めて調査することにした）。さらには香港やオランダ領東インドにも領事館を設置した。

三点目は、中国との条約関係である。当時、清国が滅び、中華民国が成立していたが、混沌の続く中国との外交関係樹立もムニョス・レジェスの仕事だった。当時の駐日中華民国公使は、親日派の章宗祥である。1919年の五四運動で失脚する前に章はムニョス・レジェスに対して両国間の条約締結を提案したようだ。ムニョス・レジェスは条約締結について中国出張も視野に入れて本国に打診したが、最終的には、1919年12月3日に中華民国との友好条約を東京で締結した。

最後に重要な点は、情報収集やプロパガンダである。日本の国際政策の方針や経済状況について定期的に報告したが、興味深いのは以下のような活動である。

当時の駐日チリ公使であるリバス・ビクニャ（Rivas Vicuña）は、ペルーやボリビアに対して外交的牽制を行っていて、太平洋戦争でチリに占領されたアリカ港をボリビアに譲渡して欲しいとのムニョス・レジェスとの秘密協議の内容を明る

みに出し、国際連盟を通じて海岸部の回復を目指すボリビアの動きを封じた。これに対して、1919年5月にムニョス・レジェスも日本の外務省に書簡を送り、さらには新聞紙上でもチリに反論を試みたようである。一方、アrikaは、太平洋戦争前ではペルー領だったこともあり、この問題は、ボリビアとペルーの間を緊張させてもいる。

ムニョス・レジェスの滞日中、世界は第一次世界大戦に見舞われ、日本は同大戦の状況を受けて一気に好景気と化し、シベリア出兵を実施した時期だった。日本の対中南米輸入も伸びていて、特にチリは、ボリビアから奪ったアタカマ地方で産出される硝石の輸出を大幅に伸ばし、チリからの輸入は1914年のから1918年までに4倍以上に増加した。こうした状況下、ボリビアと日本の間の貿易は減少しており、日本の幾つかの新聞を通じて、ボリビアの一般状況を広報するなどイメージの向上に努めたようである。

#### 4. 自由党政権の崩壊によるムニョス・レジェスの罷免と共に失われたボリビアの外交活動

1920年7月の自由党政権崩壊の煽りで東京の公使館は閉鎖され、ムニョス・レジェスも罷免され、同人の日本での、そしてアジアでのミッションは終わったが、このような活動があったことはもっと知られてもよいだろう。なお、ムニョス・レジェスは、その後、共和党政権下の政界に復帰し、議員、財務大臣、外務大臣

としても活躍し、チャコ戦争後の1937年に亡くなった。

日本におけるボリビアの外交活動については、あまり多くは知られていないがムニョス・レジェスの事績からは、両国の隠れた交流が明らかになる。

(終わり)



写真3-1 着物姿のムニョス・レジェス大使夫妻  
『ボリビアから日本へ』より

#### 4. 堀内伝重の終焉の地を訪ねて (前半)

前ボリビア日系協会連合会  
事務局長 佐藤信壽

「邦人海外発展史」から勇断の人、堀内伝重の経歴を追う

「農商務省嘱託 堀内伝重（ほりうち



でんじゅう) 遺稿』『聖母河畔の十六年』(大正15年6月発行、編纂・発行者・堀内良平(伝重の実兄・富士急行グループの創業者)という本がある。(現在、「国立国会図書館デジタルコレクション」サイトで読める。2019年7月9日に文化庁長官裁定によりインターネットへ公開済である)

2021年、ボリビア日系協会連合会より、同協会のWebサイト

(<https://www.anbj.org.bo>)の作成にあたり、20世紀前半の「ペルー下り」と呼ばれている日本人移住者の足跡を尋ね、ベニ県とパンド県の町のいくつかを訪問し、その記録は本カントゥータに寄稿している。

南米大陸への上陸地ペルーから、ボリビアへ移住した初期移民、所謂「ペルー下り」の人たちの足跡を辿る「邦人海外発展史」(入江寅次著、出版・井田書店/昭和17年)に次の記述がある。

『少数の先覚者は、早くから国民海外発展の重要性に着眼し、極力これが雄大な展開に意を用いた。身を以てこれに当り、粉骨碎身する勇断者もいないではなかった。しかしそのような勇断者の計画は、官民の同情と支持とを得ず、孤立無援の奮闘の後に、惨憺たる結果に見舞われるのが常であった。邦人の海外発展の今日あるは、近時漸く見るべきものある官民の施策と渡航者の自覚とによるところも少くないのであるが、しかしその根幹をなすものは、右のような勇断者の惨憺たる失敗の堆積と、出稼移民と呼ばれた人達の、血みどろな苦闘の結晶だといって

よい。』(下巻第二十四章二)このような記述には確かに胸に迫るものが感じられた。

堀内伝重は、まさにそのような「勇断者」の一人であったと言って良いと思う。書名の中の「聖母河畔」の「聖母河」というのは、ペルーに源流を持ちボリビアのリベラルタ(Riberalta)でベニ川(Rio Beni)に合流する「マドレ・デ・ディオス河(Rio Madre de Dios)」のことである。しかし、実際に伝重がペルーで活動したのは、マドレ・デ・ディオス川上流にあたる支流であるペルーのタムボパタ川(Rio Tambopata)沿岸であり、ボリビアでの活動はベニ川の沿岸である。マドレ・デ・ディオス川(聖母河)は、ペルーからボリビアへ約2週間の下航となる。

「聖母河畔の十六年」の記述には、編纂者の若干の思い違いなどもあるようだが、その辺りを考慮しながら、私の視点で堀内伝重の経歴を略述してみると次のようになる。

1880年山梨県東八代郡黒駒村に生まれる。1895年頃に東京の「日本中学校」(現日本学園中学校・高等学校)に入校し、その後「外国語学校」(1893年(明治6年)に制度化された外国語教育のための中・高等教育機関)に入り英語を専攻している。1902年1月に北米への「渡航免状」を取得したようだが、翌年(1903年:明治36年)の「大阪・内国勧業博覧会」を機に、兄・良平が経営する「甲州葡萄酒会社」が大阪に支店を設けたので、伝重はその業務に従事したと

ある。

また、この東京在住中には、「講道館」に入門し、柔道に打ち込んだようである。この時期の講道館には、後にブラジルで活躍し「コンデ・コマ」の通称で知られる柔道家の前田光世（1878 年 12 月生れ。）がいたことも興味ある点である。（前田は、1904 年に柔道使節の一員として渡米し、その後、ブラジルに移り 1923 年には当時のパラ州（Estado do Para）の知事に「ブラジルのアマゾン開拓には日本人移住者が適している」旨を進言したともいわれている。）

伝重には 1903 年 6 月 10 日、ペルー行き「海外旅行免状」が発行され、同月 16 日、農商務省より「ペルー国におけるゴム製造業の実況調査を囑託す」との囑託辞令をうけて、同月 20 日にペルー第 2 回移民船「デューク・オブ・ファイフ号（Duke of Fife）」に神戸で自由移民として乗船している。これを見ると、「第 5 回大阪・内国勸業博覧会（1903.3.01～7.31）」がペルー移住への刺激となっているように感じられる。

ペルー到着後は一時、英国人のボーイを務め、その後 11 月末からサンタクララ（Santa Clara）の砂糖耕地に就労し、1904 年 4 月にリマ市においてスペイン語を学習している。

1906 年にタムボパタの「インカゴム会社」に就労し、1908 年 3 月頃には、タムボパタ川のチョンタ（Chonta）港周辺において、農園開拓を開始している。（ゴム会社に就労しながら農園経営も兼

業したようである。）

1910 年には、インカゴム会社を一時退職し、「チョンタ」の農園において仲間とゴム採集や商業などを始め、1913 年 6 月には、同社の所有するタムボパタ川沿いのバルチモア（Baltimore）周辺のゴム林を借り受ける契約を結び、日本からゴム採集移住者を募集し、ゴムの採集事業を行おうとしたようであるが、ゴム相場暴落の影響もあり保留している。

1914 年 8 月に、ペルーのプエルト・マルドナド（Puerto Mardonado）からマドレ・デ・ディオス川を下航し、ボリビアのリベラルタ（Riberalta）市に入り、同市やブラジルとの国境のビリャ・ベリャ（Villa Bella）、ベニ川（Rio Beni）沿岸等を視察し、ボリビアでの日本人移住者としての活動を模索している。

因みに、この当時のリベラルタ市は、ボリビアにおける、ゴムの集積地の一つとして、また、アクレ（Acre）地区の「ボリビア北西部植民領」の行政庁所在地として繁昌していた。また、ブラジルの国境となる、マデイラ河（Rio Madeira）・マモレ川（Rio Mamore）のブラジル側沿岸には「マデイラ・マモレ鉄道」（伯：Estrada de Ferro Madeira-Mamore）が開通（1912 年）して間もない時期である。

1915 年 3 月には、再度ベニ川を遡行し、ルレナバケ（Rurrenabaque）に至り、同地での商業活動を模索し、同行した仲間の行商活動を見守っている。

仲間が各地区への行商活動に出発して行った、5 月から 8 月の間をサン・ホ

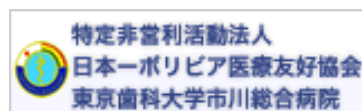
セ・デ・ウチュピアマナス（San Jose de Uchupiamonas）の集落で過ごし、同集落の人々から信頼を受け、8月に一旦ルレナバケに戻った後、12月に同サン・ホセの集落に戻り、同地に日本人植民地の建設を目指し、農場建設を始めコーヒーを栽植したが、1916年前半の作業中の事故で肋膜炎を発症し、1918年6月18日に同地で逝去している。まさに最初の部分で引用した「邦人海外発展史」のいう「勇断者の孤立無援の奮闘」が想起される経緯ではないだろうか。ルレナバケ周辺には1918年以降数名の日本人が定着し、同地の商業・農業活動の中心となっていた。（後半につづく）



写真4-1 堀内の農場があったサンホセは現在マディディ国立公園の一部となっている。

編集委員

椿 秀洋 細萱 恵子 大川 裕司



Copyright© 2002-2023

一般社団法人日本ボリビア協会  
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

（本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています）